

いつか君の花咲くとき

まきたかし＊詩

福田達夫＊絵



まき・たかし (牧岡 孝)

1935年 新潟県柏崎に生まれる。

新潟大学長岡分校修了、玉川大学(通)卒業。

1954年より公立学校教師を勤める。

現在、栃尾市上塩中学校教頭。日本児童文芸家協会会員。

詩集「ボクの場所」「愛惜の日々」

中学生のための「やさしい詩の入門」他

ジュニアボエム双書

いつか君の花咲くとき

昭和六十年七月十日初版発行

定価 一〇〇〇円

著者 まき たかし ©

発行者 柴崎芳夫

発行所 教育出版センター

〒170 東京都豊島区北大塚三―二九―二

電話 〇三―九一七―八九三〇

振替 東京〇―一四六二二

〈落丁・乱丁本はお取り替え致します〉

ISBN4-7632-4236-9 C8092

いつか君の花咲くとき

まき たかし 詩

福田 達夫 絵

教育出版センター

もくじ

四季

七夕さん 6

秋の日和 8

雪の中 12

新雪 16

野の春 18

ふるさと

山の上で 24

〈祖父のうた〉

土百姓のうた 26

希望

あながき	80	いつか君の花咲く日のために	66	ふるさとの愛の詩	46
つばさ	76	希望 ^{はる} のうた	68	山ふる里に	52
ともしび	72	くい	70	ふるさと	54
				わかもの	58
				ひとりの夜	62

四

季

七夕さん

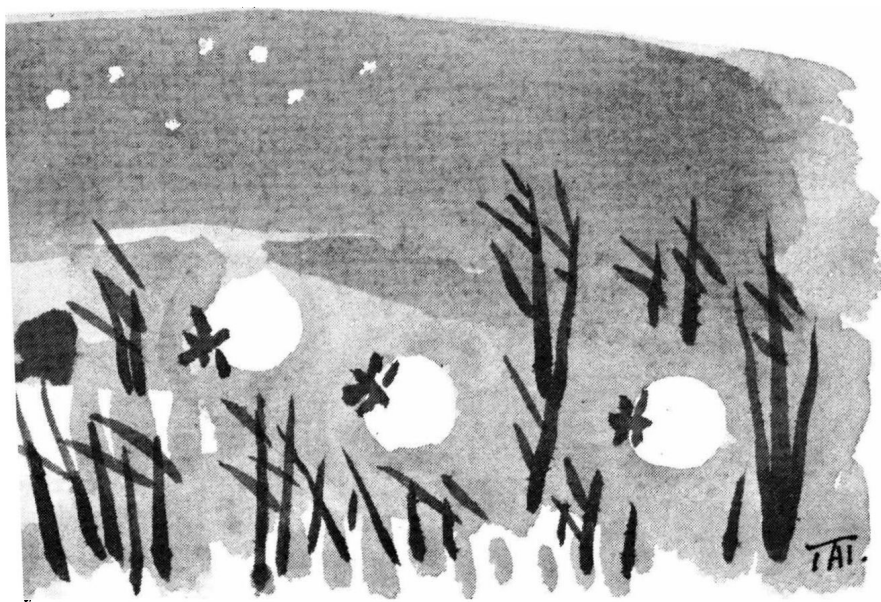
たなばた

なつのよる

ほしのながれるかわぎしに

ほたるのちようちん

おにぎり



みよちゃん

とおくのともだち

ゆめにみて

おほしさんといっしょに

さんぽする



秋の日ひより和

背すじを　ぐうんと伸ばした

地上のすべての樹木よりも

建物よりも

ああああ

両手もろてを　ばあつとひろげ

胸元むなもとが呼吸で躍動し

ふうっふうっ

足の爪^{つまさき}先まで　ぴいんとさせ

体じゅうに血液を通わせる

町と村と　眼下に

暮しと仕事を見渡し

ほうっほうっ

氣ままに

ゆったり　するりつと

山肌を足の裏に

街のドブは指^{おさ}で覆い

こざかしいもめごと^{つぶ}は踏み潰し

埃^{ほこり}は甲の厚さだけ立たせ

包みながら

拡^{ひろ}がりながら

大男の胸の温味^{ぬくもり}は

大海の陽とともに

歓びにふるえ波うち

ああ

なんとつややかな顔のかゝやき

おおおお

おおおお





雪の中

哀しく白く雪に蝕むしばまれ

ふるえるわたしの心に雪がふる

歩く足音だけが続き

この道の向こうには

晴れた町があるという

あたたかな灯があるという

きしんでいる野に立つ樹々よ

きりもみして流れるせせらぎよ

だれもが知っているのに

凍えそうなかじかんだ手になり

棒のようなぎくしゃくした足になる

ほのかな白の底の新雪にすがり

黒く萎^{なえ}るわたしの灌木^{かんぼく}が立つ

汚れたわたしの狭い空がある

悔恨でいっぱいになった白い穴に潜^{もぐ}り

消えかかる灯をたどり

石ころが氷の上をころがる音をたよりにし

吠えつづける野良犬と歩きつづける

白い底の黒い墓の行列つゞいて

節くれだった骨の灰色に驚き

雪は白く白くといわめきつつ

この向うには晴れた町が

このふりつづける中を通りぬけると

あたたかな家があるという

ああ

すべて白くなったわたしの心の中に

いとまなくふり

はてしなくふり

わたしの歩いてきた足跡は消えている。



